暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第二三三号〜

処暑　八月二十三日

雨乞いの池

暑さが止まる頃という処暑。伊勢平野では早くも稲刈りが始まっています。今年も稲が無事に稔ったことを感謝せずにはいられません。稲作に欠かせないのが、水です。今では農業用水が整備され、その心配は減りましたが、かつては七、八月に日照りが続くと雨が降るように神仏に祈る雨乞いが農村で行われました。鉦や太鼓を打ち鳴らし、雨乞い踊りをしたり、村人が神社に籠ったりとその方法はさまざまですが、明和町本郷地区では、雨乞いのたびにひささ池という池の底に土器を重ねることをしていました。

ひささ池は、田園地帯の中にこんもりと茂る林にあります。この一帯は、古代から土器の一大生産地であった有爾郷で、現在も神宮土器調製所があり、神事用の土器が作られています。地元ではかつて土器を作るにはひささ池の水を使わないと壊れてしまうと言われていました。

この池で戦前まで雨乞いが行われていました。平成九年に地元の人々が池を掘ると、大きな鍋状の土器を上向きに三個重ね、それに蓋をするように大小の鍋状の土器が伏せて重ねてあったそうです。この地域では「伊勢鍋」と呼ばれる土器が古代から作られていたようですから、その一部を埋めたのかもしれません。雨乞いに土器を使う、生産地らしいやり方に思いました。

池の近くには「三本榊」と呼ばれる有弐神社跡があります。そこには一株から三本の幹が伸びる榊の木がまつってありました。ひささはヒササキ（榊の代用）から来ているのかもしれません。今ではこの一帯には宮川用水が引かれています。土器作りの里にあった神聖な池は、その役目を終えたかのようにすでに干上がっていました。池底のわずかな湿り気に往時が偲ばれます。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁